

第35回大日本耳鼻咽喉科中國地方會記事

期日 昭和12年3月7日

場所 岡山醫科大學第一講堂

幹事 高原滋夫記

1. 幼兒喉頭乳嘴腫の1例

龍 治 好 道

患者は1年8月の男兒、何等原因と思はるるものなくして生後4月頃より音聲の嘶嘎を生じ、某耳鼻科醫にては聲帯の糜爛なりと云はれ、内科醫にては乳兒脚氣、某小兒科醫にては佝僂病等と診断され、其都度命ぜられたる手當を受けたるが音聲の嘶嘎は漸次増悪するのみか、最近呼吸困難をも加へたる爲來院せしものなり。診るに體格中等度なるも榮養勝れず、呼吸困難は相當高度にして鼻翼性呼吸を營み、全身に軽度の「チャーノーゼ」あり、他に著變なく皮膚にも疣の如きものなし。一見して本例は聲門部に狹窄あるは略明かなれば直達鏡検査を行ひたるに肉眼的に乳嘴腫なる事を知り組織的にも夫を確めたり。本例の如く幼兒喉頭乳嘴腫が不用意にも往々誤診さるる事あるは注意を要する所にして、斯かる疑ある際は必ず直達鏡検査を試むべく、其際該腫瘍が小顆粒状をなし色調が喉頭粘膜の夫と相似たるは稍ともすれば之を見逃すの原因たり。尙療法として演者は氣管切開を施し、出来る丈腫瘍を摘出し其後「ラヂウム」を喉頭に挿入したるも、腫瘍は容易に再發し、結局演者の本例に於て施し得たるは、氣管切開口を與へたる事に止りたり。斯かる際稍ともすれば家人の不滿を招く傾あれば、最初より氣管切開を行はず、出来る限り喉頭内手術を行ひ、次でX線又は「ラヂウム」療法を行ひ、其間充分家人に氣管切開の必要を痛感せしめて後施行するが宜しと感じたり。

2. 中耳「ヒヨロステアトーム」に續發せる迷路炎の1症例

福 武 豊 次

演者は最近39歳の男子にして約12年前右側慢性耳漏を主訴として來院し、眞珠腫なる診断の下に再三手術を奨められたるも、當時何等の自覺症狀無きため今日迄放置し居たりし患者が、本年1月に至り急に激烈なる眩暈並耳鳴を訴へるに至りし爲今回は患者自ら手術を希望し來院するに遭遇したり。精査の結果迷路炎と診断され、之が處置としては斯かる際中耳根治手術の他、尙進んで迷路を開放すべしとの意見あるも、當時發熱、嘔吐、頭痛等の刺激症狀無きため斯かる際の當教室の方針に従ひ單に根治手術に止め迷路を開く事なく、唯、手術後度々腰椎穿刺を繰返し脊髄液の性状に注意しつつ單に保存的療法を續けしに經過至極良好にして遠からず治癒に赴くものと思はるるに至りたり。而して本例に於て注意すべきは、初診時に著明なる定型的瘻孔症狀を認めたるも、3日後には既に瘻孔症狀消失し、果して迷路壁に瘻孔ありや否や不明に思はれたるも、手術を行ひし處、正しく水平半規管に瘻孔を認めたり。されば瘻孔症狀の初診後3日目に消失せるは、恐らく迷路炎進行し水平半規管の聽櫛の機能殆ど消失せるか、或は非常に減退せるに因るならんと述べたり。

3. 幼兒の扁桃腺周圍膿瘍

淺 黃 由 喜 雄

乳幼兒に於る扁桃腺周圍膿瘍は甚だ稀有にして

エルセーゼル氏によれば扁桃腺炎 160 例中 1 例、
 ゲルハルト氏によれば 106 例中 1 例なるも、岡山
 醫大耳鼻科教室に於ては過去 5 年間に 3 例を見た
 るは注意すべき事ならん。而して演者は又最近 2
 年 2 月の女兒に於ける扁桃腺周囲膿瘍の症例を経
 験し、而も其の成立機轉に於て甚だ興味深く覚え
 たりとて之を報告せり。即ち 2 週間程前に右耳翼
 周囲に濕疹を來し、其後 4, 5 日にして右側顎下部
 の腫脹せるに氣付き、醫師の治療により濕疹は治
 癒せるに拘らず顎下部の腫脹は益々其度を増し、
 更に頤下部にも及び、2, 3 日前よりは發熱 38 度 5
 分に達し、牙關緊急、嚥下困難を來し、軽度乍ら
 呼吸困難をすら來したるを以て我科を訪れたり。
 局所所見は明かに扁桃腺周囲膿瘍なるも、口蓋扁
 桃腺は極く軽度に肥大せる外發赤を見ず、型の如
 く口腔内より切開を加へ排膿を圖り、4 日にして
 手術創よりの膿汁甚しく減少せると共に頓に顎下
 部の腫脹の減少せるを見たり、之等の経過よりし
 て演者は、本例は耳翼の濕疹より起炎菌が深部の
 淋巴腺を侵し、炎症は更に内部に進行し扁桃腺周
 圍膿瘍を起せるものならんと思惟せると述べたり。
 而して乳幼兒に於ては頸部の深在性淋巴系統の發
 達は大人の夫に比し著しき點竝に乳幼兒の扁桃腺
 は、解剖學的に上扁桃窩竝に腺窩幅廣く淺き爲、
 炎症の周圍に波及する事尠き事より併せ考へ、乳
 幼兒の扁桃腺周圍膿瘍中には斯かる成立機轉をと
 れるものあるならんと附加せり。

追 加 山 口 治

幼兒に扁桃腺周圍膿瘍の存するや否やに關して
 は未だ尙疑問を有せる人々あり。曾て某學會にて
 其地方の大家が幼兒の扁桃腺周圍膿瘍は決して存
 在せずと迄云はれ、其席上或る教授は幼兒に於て
 も存在すと述べ疑論のありたる事あり。面白く思
 ひ出したるにより追加す。

追 加 瀬 戸 忠 次 郎

2 例の幼兒の扁桃腺周圍膿瘍例を追加せり。第
 1 例は 4 歳の女兒、咽頭「ヂフテリー」の治療中、
 既に義漢の消失せる頃より兩側扁桃腺周圍膿瘍並
 下顎隅角部淋巴腺腫脹を來し、口腔内より切開し
 治癒せり。第 2 例は生後 100 日の女兒、感冒後鼻
 汁過度、呼吸困難、開口困難、哺乳不能となり啼
 泣に際し嘔吐を來す。診るに左側扁桃腺周圍膿瘍
 あり、扁桃腺上後方より自潰排膿し、尙穿刺を行
 ひて全治せしめ得たり。

追 加 西 村 伊 勢 松

2 歳の小兒、頸部淋巴腺炎の手術を外科にて受
 け、其後治療中に嚥下困難を來したり。其際扁桃
 腺には發赤腫脹を見ずして、其周圍に膿瘍を見た
 り。本例は扁桃腺より來りしものか、淋巴腺炎よ
 り來りたるものか不明なるも只今の演者の説の如
 く淋巴系より來りたるものならんと思ふ。

追 加 笠 井 經 夫

余も又最近幼兒の扁桃腺周圍膿瘍の 2 症例に遭
 遇せり。其中 1 例は 4 歳の幼兒にして強度の呼吸
 困難を伴ひ、夜に入り呼吸困難は一層激烈となり、
 遂に餘儀なく氣管切開を行ふに至り、其後腎臟炎
 を合併し死亡したり。

4. 實扶的里血清初回注射後の類過敏 症に就て 渡 邊 武

嘔聲を主訴とする 5 歳の男子に對し、喉頭實扶
 的里の疑の下に血清を注射するに先立ち、既往に
 血清注射を受けたる事無きを確めたる上、試験的
 に 0.05 cc を上膊の皮内に注射し、約 30 分後注射
 部位に反應を認めざりしを以て、全量 3000 單位
 3 cc を臀筋内に注射せし處、約 2 分後重篤なる類
 過敏症を起せる爲、直ちに「アドレナリン」、強心
 劑等の注射をなし危急を救ひ得たり。尙後に至り

此患者は少量の牛乳飲用に依りても自家中毒症状を呈する特異の體質を有する事を知れり。演者は此例より、初回に於ける血清注射に際しては、再注射の場合よりも寧ろ一層の注意を要するものにして、既往に於て自家中毒症其他の「アレルギー性疾患」に罹りしことありや否やを充分に確かむる必要あると共に、實際注射に當つては、皮内注射に依る試験法にても少量に過ぐる時は反應を示さざることあり得るを以て、假令初回注射に於ても先づ上膊の皮内に0.05 cc, 30分後0.2 cc, 更に30分後0.5 ccと少くとも3回位の試験注射をなし、然る後全量を注射すべきなりと提唱したり。

追 加 山 口 治

血清病豫防上の目的で「カルシウム」の注射が行はれて居るも、小兒科にては「ビタミンB」をも用ひ居れり。余も之を行へるが非常に効果ある様に思はる。

追 加 岡 貞 邦

演者の報告せる症例は余も共に觀察せるものなるが、患者幼少にして喉頭を簡単に視診し得ざりし爲、從來より「クループ」と「假性クループ」とを鑑別する一補助法として用ひらるる「アドレナリン」の皮下注射を試みたるが、血清0.05 ccを注射せるは其約30分後なりき。此豫備注射後反應現れざりし原因を考ふるに、試験注射の血清量少量に過ぎたる事も關係あらん（嘗て本地方會に於て笠井氏は血清0.05 ccを注射せるのみにて既に重篤なる過敏症を起したる例を報告せらる。之より考ふれば強ち過少とは言へざる可し）も、一方前以て「アドレナリン」を注射し置く事に依りて、後に起り得べかりし過敏症を避け得られたりと考へらるる場合多しとの説有るを思ひ合はさば、此鑑別診断に用ひし「アドレナリン」が關係ありものならんかと考へらるるなり。之より思ふに、血清注

射直前に「アドレナリン」注射を行ひたる場合は、假令血清の少量豫備注射をなせる部位に反應現れざる場合と雖も、之に次ぐ大量注射には慎重を期する要あり。

追 加 富 永 馥

鼻「チアテリー」、4歳の男子。曾て血清注射を受けし事無きを以て、血清3號3筒を注射すべき豫定にて試験的に0.5 ccを注射せし處、數分にして顔面著しく蒼白、呼吸促迫、脈搏微弱緩徐となり結滯し次で殆ど觸知し得ざるに至り、直ちに「アドレナリン」、「ロヂノン」、「ヂガレン」を注射し、酸素吸入を行はしめ、約1時間にして稍恢復したるも、脈搏尙微弱なり。第2日目試みに血清0.5 ccを注射したるに前日に比し稍經き同様な反應を呈し、數時間後漸次恢復したるも脈搏尙微弱なり。第3日目1.0 ccを注射せしに又經き反應出現し強心劑の注射により容易に恢復し得たり。第4日目午前に1.0 cc、午後1.5 ccの注射を行ひしが反應既に出現せず。第5日目2.0 cc注射し反應なく、第6日目3.0 ccを注射して全量終りて目的を達し、第8日目に全身に發疹を見たるも、爾來普通の経過を取り2週間にして全治したり。余は此他に尙初回注射による即時反應の2症例を有す。之に依つて考ふれば血清を用ふる場合にありては常に充分なる注意を拂ひ、先づ0.25位を試験的に注射し、即時反應の有無を知りて後「アドレナリン」と共に所要の分量を注射すべきが最も安全ならん。

5. 象形複成法による海綿洞神經叢構造の檢索 川 本 重 雄

嘗て演者は内頸動脈神經叢の構造に就て報告したるが、今回はこれに次で其連續である所の海綿洞神經叢に就て報告せり。材料としては人類の成

熟胎兒の屍體 6 體を選び、其前額面に於て連続切片を作製し本法を應用せり。而して次の如き諸項に互つて論述する所ありたり。海綿洞神經叢の外旋神經との物合、三叉神經との物合、動眼神經との物合、滑車神經との物合、幕狀小腦神經、毛様神經節交感神經根、楔口蓋神經節との物合、腦下垂體との物合、血管枝、視神經鞘へ分佈する分枝、神經叢内の有髓神經纖維及び神經節細胞群。

追 加 山 口 治

人體の形態學的研究は 1800 年代に始り、其後は一時衰へたりしが最近に至り再び再検討さるるに至れり。演者の研究さるる箇所は今迄之を放置されて居た所で、極めて解りにくい所であり、本研究の方法に就ては岡山醫科大學解剖學教室に於て種々御指導を仰ぎ、便宜を與へられた事に對して、私より茲に感謝の意を表す。

6. 皮膚轉移を汎發せる鼻癌腫の 1 例

川 本 重 雄

一般に悪性腫瘍にして皮膚轉移を形成するは比較的稀ると云はれ、殊に吾々専門領域に於ては斯かるものに接すること更に少し。演者は 30 歳の男にして、1 箇月前より鼻閉塞、膿性混血性鼻汁過多及び偏頭痛を訴ふる患者に遭遇し、診るに右上眼窩縁腫脹し、鼻腔は惡臭を放つ痴皮にて蔽はれたる腫瘍にて充たされ、腫瘍は右前額竇、篩骨蜂窩を充たせり。之に對し「ラヂウム」照射により原發部位は殆ど治癒に赴きたるも引續きて顎下淋巴腺轉移を來し、次で前額部に於て初め左眉毛内端直上に小指頭大の腫瘍現れ、又頭髮發生部に接して 1 箇、次で右眉毛中央上方に 2 箇、合せて 4 箇の腫瘍相前後して現れ、其他顛頂部及び耳後部に夫々 1 箇大豆大のものを生じたり。顛頂部の轉移は眞皮中に發育したるものなれども前額部のもの

は或は皮下にありしものならんかと考へられ、組織像は何れも髓様癌の像を呈し居れり。其他胸部に 1 箇、腹部に轉移の疑あるもの 2 箇を發生せり。斯くして皮膚轉移を見るに至りて後 30 日、主訴發來後 4 箇月にして不幸死の轉歸を取れり。而して演者は斯くの如く鼻の癌腫にして皮膚轉移を作りし例は僅かに中村博郷氏の報告せし 1 例を見るのみにして極めて稀なる症例と考へらるとし、發生機轉に就ては前額部及び頭部に發生せるものは恐らく淋巴道を介して逆行的に細胞の運搬されたるものにして、胸部、腹部に發生したるものは、或は血行によりたるものならんと思惟すと述べたり。

7. 實扶の里罹患後の口蓋扁桃腺に就て (續報) 大野 勤 次 郎

演者は前回の本地方會に於て、4 例の咽頭「ヂフテリー」患者に對し、其治癒後扁桃腺の全摘出を行ひ、其摘出扁桃腺に就ての検査成績を報告し、一度本症に罹患せし者は、假令血清注射其他の療法により臨牀症狀消失せしものにありても、尙久しく其扁桃腺窩或は實質内に、「ヂフテリー菌」を潜伏せしめ居るものなるを注意せり。其後更に 2 症例を加へ得て検査せし結果、一層此信念を強め得たるを以て、此 2 例に於ける検査成績を追加報告せり。

第 1 例、井上某女、21 歳、本年 1 月 27 日初診 定型的咽頭「ヂフテリー」の所見あり。血清注射後 3 日にして義膜全く消失す。其後 3 週間經過して扁桃腺の全摘出を行ひ、前回に述べたと同様の方法により、精細なる検査を施行せし結果、其腺窩及び實質内に毒力強き眞性「ヂフテリー菌」を保有せるを知り得たり。尙又本例に於て臨牀的に著變を認めざりしにも拘らず、其扁桃腺組織極めて脆弱となり、組織的検査により其實質に高度の破壊現象を認めたるは、之又多少注意すべき事實

ならん。

第2例、田中某女、21歳、昨年3月3日初診。

本例に於ては、「デフテリー」治療後滿1箇年を経過後、摘出検査せしにも拘らず、尙且其扁桃腺窩内に、恐らく眞性「デフテリー菌」と思はるるものを潜伏せしめ居るを知り得たり。

8. 聲帯の「アテローム」様囊腫に就て

登坂清

演者は最近、從來比較的稀有なりとされたる聲帯の「アテローム」様囊腫の1例に遭遇し、其臨牀所見に於て癌腫を思はしめるものありたる爲鑑別に當り甚だ困難せりとて其経験を述べ、併せて組織像を示したり。患者は68歳の男子、約6月以來聲音の持続的嘶啞あり、次第に増強し殆ど失聲状態に到りて来院したるものなり。診るに右聲帯上に於て、略中央部より後方に亘り小豆大の廣き基底を有する腫瘍あり。淡紅色を呈し表面は大體に滑澤、前方は少しく球狀に隆起し後方は次第に聲帯上に移行す。聲帯の運動は左程侵害されざるも發聲時後方に間隙を残す。即ち以上の所見は一般喉頭良性腫瘍とは稍趣を異にし、又癌腫とも其表面の性状、色彩に於て相容れざるものあり。されど患者の年齢、6月以上に及ぶ聲音嘶啞、而も1側聲帯上に限局する腫瘍なる點に於て癌腫の疑を全く放棄し得ずして、試験的切除を試みたるに薄き被膜に圍まれ、黄褐色泥狀物質を充したる囊腫にして、之を喉頭鏡下に除去する事によりて嘶啞は全く消失せり。組織的に囊の内外壁は何れも重層扁平上皮を以て被はれ、外壁は即ち聲帯粘膜にして、兩層間には多數の血管を含み、多少の炎症性細胞浸潤を有する鬆粗結締織在るも、除、圓柱上皮等を缺き、ヒアリー氏の所謂「アテローム」様囊腫に屬するものにして、嘗て桑原氏の「聲帯の先天性上皮囊腫」として報告せるものに一致すと。

9. 哺乳兒の腺様増殖症に就て

小坂昭男

從來腺様増殖症は哺乳兒に發來することは非常に稀なりと考へられたるも、注意し觀察せば本症は哺乳兒に於ても左程稀なものに非ず。演者は我臨牀に於て最近6年間に於ける哺乳兒の腺様増殖症を調査の結果、13例の多數を見たり。即ち6箇月未滿の乳兒5名、1年未滿の乳兒4名、2年未滿の者4名、計13名にして最年少は生後2箇月最年長は1年11箇月のものにして各々著明なる鼻閉塞による呼吸困難、哺乳障礙、其他發育不良、鼾聲、睡眠不安等を主訴とせるものなりしが、之等に就き精しく検査の結果、何れも單純なる鼻「カタル」遺傳微毒等に因るものに非ずして、之等の障礙は實は咽頭扁桃腺の肥大に因るものなるを知り、早速之をベツクマン氏輪狀刀を用ひ切除せる結果、術後の経過は良好にして何等憂ふべき合併症を起すことなく、手術前の主症は殆ど忘れたるが如くに消失したり。殊に注意すべきは此内6例は術前發育の非常に遅れたるものなるが、術後の發育は實に目覺しく、家人の喜びは驚ふるに言葉なく、之を治療せし余自身も其効果の著しきに驚きたりとて表に就き術後の發育顯著なる状態を説明せり。

追加 細見 英

余も嘗て之に就て報告したる事あり。只今演者の言はれし如く哺乳兒が長期に亘り鼻呼吸困難と共に哺乳障礙のあるものに對しては先づ遺傳微毒を疑ふべきものなるも、之が微毒なるや否やに就ては其他の症狀を考慮せば其診斷は必ずしも困難に非ず。故に吾人は斯かる微毒を否定し得る場合に於て、哺乳兒が前記の如き障礙を訴ふるものは一應腺様増殖症を疑ひ、之が切除術を試むべきものと信ず。而して此手術操作は申す述もなく極

めて簡単にして何等危険を伴はざるものなるが、臨牀家として總ての手術の慎重を期する意味に於て、即ち胸腺淋巴體質の如き異常體質者に向ひ急劇に衝動を興ふる事無き様、余は手術施行の数日前より2,3回鼻咽腔に塗布棒の挿入を試み、斯かる操作に慣れさせたる後手術を行ふ事と致し居れり。

10. 「アグラヌロチローゼ」の實驗的研究 小坂 昭男

「アグラヌロチローゼ」は從來其原因不明とされたるも、最近に至り本症が時に「サルヴアルサン」「アミドピリン」「アロナール」「ルミナール」等の薬剤の中毒によつて發來する事あること明かとなり、のみならず從來シュルツの所謂原因不明の「アグラヌロチローゼ」として取扱はれたる症例も其病歴を精査すれば斯かる薬剤中毒によるもの尠からず、而して斯かる薬剤中毒に因る「アグラヌロチローゼ」の原因は之等の薬剤中に含まる「ペンツオール核」にありて、之が骨髓を侵害する結果なりと推定さるに至れり。此點臨牀上大に興味を覺ゆるものにして、演者は此實驗的研究を試み6頭の猿及び少數の家兎を用ひて之等「ペンツオール核」を有する薬剤、就中「アミドピリン」「アロナール」「ルミナール」、石油を夫々注射或は内服せしめ、詳細に其血液像を検査の結果次の如き成績を得たり。

1. 「アミドピリン」「アロナール」「ルミナール」を夫々比較的少量宛26日乃至70日の長期間に亘つて連用せしものは其血液像に何等善變を認めず更に之等薬剤の大量を一時に投與したるものに於ても、一般に所謂 Toxische Leucocytose 即ち白血球總數の増加及び中性嗜好細胞の核の左方推移並其原形質の鹽基性着色を證明したれども「アグラヌロチローゼ」は發生せしめ得ざりき。

2. 石油を背部皮下に pro. kg. 1g の割合に注射せし家兎に於ては「アグラヌロチローゼ」に一致せる血液像の變化を證明し、のみならず其骨髓を組織的に検査の結果、實質細胞の減少、就中、中性嗜好分葉核細胞は殆ど消失し、明かに骨髓機能の減退を思はしむる所見を證明し得たりとて演者は夫等血液像に就て表示したり。

11. 「ストレプトコックス・ムコーズス」に因る義膜性咽頭炎の1例

岡 貞 邦

患者は12年6箇月の女兒にして嚥下痛を主訴として來る。咽頭を診るに、左右側索腫脹し、此處より咽頭後壁にかけて帯黄白色の義膜を認む。之は比較的容易に剝離し得たり。咽頭、鼻腔、其他の部位に義膜なし。義膜の塗抹標本を鏡檢せるに廣き莢膜を有し、且長き連鎖を作れる定型的「ストレプトコックス・ムコーズス」を殆ど純粹培養の状態に認めたり。(標本を供覽す)特別の處置を加ふる事なくして5日後には義膜消失し全治せり。定型的肺炎雙球菌(即ち其第1及び第2型)に因る義膜性「アンギーナ」は屢々見らるるものなるも、演者は本症例に依りて、肺炎雙球菌の第3型即ちシヨットミユラーの命名に依る「ストレプトコックス・ムコーズス」に因りても之と略同様の所見を呈する義膜性咽頭炎の來り得る事を知れり。

12. 鼻壞疽の1例 松浦 三郎 上塚 萬壽男

演者は最近種々細菌及び組織學的檢索を行ひたるも結局原因不明の中に鬼籍に入りたる極めて稀なる鼻壞疽の1例に遭遇したるを以て報告せり。即ち患者は生後43日の乳兒にして家族歴に特記す可きもの無し。生後30日頃より左鼻翼に粟粒大の黒色を帯びたる斑點を生じ次第に増大するを以

て當科を訪れたり。視るに一見榮養不良なるも内科的著變なし。左骨部鼻翼の前縁に米粒大の潰瘍性瘻孔ありて左中鼻道と交通し鼻腔は蒼白にして痂皮形成あり。血母ワ氏反應陰性。患者の血液像は單に多少の貧血を示すのみ。該部の細菌及び組織學的検査に於ても認むべきものなし。療法として光線照射、驅菌療法、榮養劑注射等を行ひたるも何等奏效せず。初診後10日目には左鼻翼の殆ど $\frac{1}{2}$ は脱落し、鼻中隔を侵襲破壊せしめ右鼻腔を侵すに至り、加ふるに榮養日々に衰へ初診後15日にして死亡せり。

追 加 藏 本 養 三

余は第30回本會席上に於て、鼻腔、鼻翼、眼窩縁及び口蓋等に廣がり波及した進行性顔面壞疽の1例を報告せしが、先般ベルリンの小田助教授よりアイケン教授の臨牀に於て、余の症例に基だ酷似した1例に遭遇せられたりとの通信ありき。斯かる例は獨逸にても甚だ稀とされ、大に興味を以て研究せられ居るも未だ原因は全く不明なりきと。

13. 先天性耳瘻孔に就て

松 浦 三 郎

最近演者は先天性耳瘻孔化膿の4例に遭遇し、且一方川崎造船所經營乙種工業學校生徒募集體格検査の際、先天性耳瘻孔の統計的觀察を行ひたるを以て之等に就て併せ報告せり。

即ち4例は共に耳輪脚部に生じたる瘻孔の化膿にして、第1例は9歳の女、第2例は18歳の女、第3例は22歳の男にして、共に數回の化膿を経験し、毎回姑息的に處置せしを以て、第1例の局部は約1錢銅貨大の光澤ある癩痕と化し、第2第3例は拇指頭大の囊腫様となり中に膿汁及び表皮廢屑物を藏せるが、共に囊壁を剔出し囊壁不明となれる所は之を搔癢し治癒せしめたり。第4例は27

歳の男にして、長さ約3cmの管孔を有せるが之を剔出し治癒せしめたり。其組織的所見より瘻孔は單純なる管腔に非ずして分岐を有し、又多くの軟壁を有するが如きを認めたり。

嗣つて耳瘻孔の出現率を見るに検査總數4422名中瘻孔を有せるもの93名、即ち100分率は2%にして、瘻孔を有せるものの中、該部の化膿を嘗て自覺的に認めたるもの約3%なり。最後に演者は、本症例の治療に當り、種々の姑息的處置に依る場合は反覆化膿し、時には濕疹或は潰瘍を形成し存苒治癒に赴かず、又は癩痕の醜態を示すを以て、寧ろ根治的に瘻孔の剔出を行ふを可とすべく、殊に第4例の如き組織的所見を示すものありとすれば尙更なりと述べたり。

14. 臨牀的竝に組織學的に興味ある所見を呈せし下咽頭扁平上皮癌に就て 細 見 英

演者は約半年以前より咽喉閉塞感、嚥下痛、聲音嘶啞次第に增強する食物の通過障礙竝に呼吸困難を主訴とせる年齢61歳の一老婦に於て、局所的には下咽頭腔を滿たせる大なる腫瘍の存在するを見、即ち該腫瘍は小雞卵大、黒褐色、表面滑澤、弾力性硬、多少可移動性にて腫瘍の下面に短き莖を有する、一見良性腫瘍の如き臨牀的所見を呈せしものにして、演者は之に熟蹄係を使用して豫想外に容易に之を除去する事を得、本腫瘍が右側咽頭梨子状窩より發生せるを知れり。而して演者は此摘出せる腫瘍を更に組織的に検索せしところ、腫瘍の大部分は間質組織の異常増殖によりて占められ居るも、其莖部に近く一部分明かに扁平上皮癌組織の存在するを認めたり。即ち本例は其組織的検査の結果、臨牀上良性腫瘍の如き觀を呈せるものが、實は癌腫なりしことが確定され、其後は矢張り咽頭癌としての経過を辿りて約1年後に死

亡したるものなり。斯かる症例は日常吾人の目撃する下咽頭癌腫に對比し一異型症例と云ふべく、臨牀上多少興味あるものとして其症例の概要に就て述べ、併せて腫瘍の組織標本竝に其顯微鏡寫眞を幻燈によりて供覽せり。

15. 鼓室竝に外聽道に互れる内頸動脈瘤(?)の1症例

高原 滋 夫
龍 治 好 道

患者は38歳の婦人。昭和8年2月(4年前)風邪に罹り左側耳鳴、顔面神経麻痺を來し當時我科を訪れ「カルテ」に青色鼓膜の像の記載あり。其後2年を経て突然同側外聽道より大出血ありて専門醫の「タンポン」にて漸く止血、爾來1年間出血無かりしも昨年6月に又々大出血ありて今回は容易に出血止らざる爲徹底の治療を求めて同年9月來院せるものなり。診るに左側顔面神経麻痺高度にして閉眼出來ず。外聽道内には暗紫色の表面葡萄状をなす腫瘍窺き、その周囲より臭氣ある膿汁を出す。腫瘍に穿刺するに鮮血の大量を容易に吸引し得て該腫瘍が大血管と何等かの交通あるを推はしむ。尙左側耳を全く聾なり。演者は嘗ての病歴の記載を參考とし、恐らく本例は慢性中耳化膿症の爲鼓室底部の壞疽性脱失を來し其部より静脈球の一部の静脈瘤様に窺きたるものならんと推ひ、取敢へず根治手術を行ひたり。然るに中耳内には膿汁充滿し、骨部外聽道後壁並鼓室底は既に破壊消失し、腫瘍は鼓室に充ち内頸動脈の近くより出でたるものの如く觀察されたり。而して術中出血多量にして到底腫瘍の摘出は不可能と思はれたれば其儘にて術を終りたり。其後根治手術創は速かに全治し、腫瘍は萎縮し再び出血を見ざるに至りたり。

本例は腫瘍を摘出したるに非ざれば聊か診断の

斷言を憚る所あるも、恐らく内頸動脈と關係ある動脈瘤なるか、更に進んでは内頸静脈球部とも關係ある動静脈瘤に非ざるかと述べ、本例と類似せるマツケンジャー(亞米利加)の症例を引用したり。

16. 喉頭貫扶的里の豫後に就て

高原 滋 夫

演者は過去5年間に岡山醫大耳鼻科教室に入院せる「チフテリー」患者125人に就ての統計的觀察を行ひ之を報告すると共に、殊に喉頭「チフテリー」の豫後並療法に就て述べたり。「チフテリー」の全死亡例は23例(18.4%)にして内、喉頭と關係無き「チフテリー」は53例にして死5例(9%)、喉頭と關係ある「チフテリー」は72例にして死18例(25%)なり。而して喉頭「チフテリー」72例中氣管切開を行ひたるものは48例にして死16例(33%)、氣管切開を施さざるものは24例にして死2例(8%)なり。尙演者は之等喉頭「チフテリー」にして死亡せる18例に就て、發病より血清注射迄の日數、血清全量、尿所見等を回顧觀察すると共に、尙其死因に就て詳細に検討し、18例中4例は心臓麻痺、11例は呼吸困難、1例は呼吸困難と心臓麻痺にて死亡し居るを知りたり。而して夫等死因の大多數をなす呼吸困難の11例を更に精査するに、合併せる肺炎の分泌物による窒息4例、下降性「チフテリー」の義膜による窒息7例、氣管切開中に窒息せるもの1例、套管交換中に騒暴し窒息死を來せるもの1例なり。之よりして演者は喉頭「チフテリー」に於ては、從來考へらる如く毒素による單純なる心臓麻痺に因るものよりも、斯くの如く分泌物又は義膜による窒息の死因たるもの多きを指摘し、喉頭「チフテリー」に於て假令氣管切開により一時呼吸安靜となるも、斯かる機械的窒息を來す事尠からざればその豫後には餘程の注意を要すると共に、氣管切開後尙呼吸困難の存

する際は氣管切開孔より氣管枝鏡を挿入し出来る限り分泌物又は義膜の除去に勉むべきなりと述べたり。

追 加 田 中 文 男

我教室を訪ねる「チフテリー」患者は概して重症のもの多き爲此統計を以て直ちに「チフテリー」一般の豫後を論ずるは不可なるも、余の際て知らんと欲し居たる我教室の「チフテリー」死亡率を茲に適確に知り得て参考となりたる點甚だ多し。即ち喉頭「チフテリー」の死亡率は25%にして、内氣管切開を施せしものの死亡率は33%なるが、之より觀るに未だ「チフテリー」の治療に當りては多々努力改善の必要ありて、演者の唱へたるが如く氣管枝鏡検査法も其一方法なりと信ず。

追 加 山 口 治

昨年本地方會にて喉頭「チフテリー」患者にて氣管切開後も尙呼吸困難去らざるものに對し氣管枝鏡検査法を行はれたる報告ありて、教へらるる所あり、偶々昨年は重症患者の多數に遭遇したるを以て本法を應用したるに甚だ偉効を収め得たり。

17. 我教室に於ける氣管切開に就ての統計的觀察 田 中 文 男

演者は岡山醫大耳鼻科教室に於て過去5年間に施したる氣管切開竝に其後に來り得る氣管套管拔去困難症に就ての統計的觀察を行ひしに、氣管切開の全數は101例(「チフテリー」46例、「假性クループ」10例、異物11例、其他34例)内小兒は68例なりき。而して我教室にては種々の理由より原則として大人には上氣管切開術、小人には下氣管切開術を施し、特別なる場合、即ち喉頭癌にして喉頭の全摘出又は截開術を行ふ豫定の場合には大人にても下氣管切開術を、又小兒にてもやむを得ざる場合に於ては上氣管切開術を施し居れり。

然るに101例の氣管切開中、「チフテリー」に對して行ひたるものには套管拔去困難症は皆無しにして、「假性クループ」に於ては10日以上拔去困難なりしもの5例、内4例は22日目に、1例は50日目に拔去し得たり。其他幼兒異物に於て1例之に遭遇し1月の後治癒せしめ得たり。之等事實より演者は幼兒「チフテリー」に於ては下氣管切開術を正確に施せば套管拔去困難症を來すこと殆ど無しと言ひ得可く、之に反し「假性クループ」に於ては術後速急には套管を拔去し得ざる事あるを覺悟すべきなりとし、更に自己の經驗より「假性クループ」後の套管拔去困難症には特別の治療を施さずとも略3週日を待たば聲門下腔の炎症は漸次消失し自然に套管を拔去し得るに至るものの如く、尙3週日以上經過すも拔去し得ざるものに於てはオードワイエルの喉頭挿管法を選ぶを宜しとすと述べたり。

閉會の辭 田 中 文 男

今回は教室外からも多數の報告あり、且追加討論も多く非常に盛會なりし事は本會のみならず、我國耳鼻科學會の爲にも大いに有意義なりし事と信ず。次回には新築の我教室を御紹介し得る事となるべく多數御來會下さる様御願ひす。

當日出席者 (いろは順)

外來者

石井、西村、細見(英)、岡、尾鐘、渡邊、河合(廉介)、掛谷、笠井、川本、吉田、田村(勇)、高越、山口、山末、馬詰、松浦(三郎)、福武(敏重)、藤森、菰口、安原、美田、森、瀬戸、杉、杉山(悦子)

教室員

原田、登坂(清)、土井、龍治、大野、田中、高原、萩本、松浦(祐一)、藤山、福武、小坂、淺黄、佐藤